



年男・年女の職員紹介

今月号では、今年亥年の年女年男の職員の皆さんをご紹介します。



リハビリテーション科
井上 幸哉

「回復期リハビリテーション医療について」

前回の年男の頃から、地域のニーズを考えるとリハビリテーション医療の充実は不可欠と考えていましたが実際には難しい問題が多く、平成26年になってようやく回復期リハビリテーション病棟の開設にたどりつきました。ここは手術のあとなどで後遺症や体力低下が残っているために元の生活や職業に戻れない患者さんを対象として、数ヶ月をかけて集中的な訓練をおこない、環境調整や社会資源の利用など、退院の準備を総合的にお手伝いする病棟です。

さまざまな患者さんに必要な支援は多岐にわたる場合が多いので、看護師、療法士、介護士、社会福祉士、栄養士、臨床心理士等々、たくさんの職種のスタッフによるチーム医療になるのが大きな特色です。本来はその過程のすべてをリハビリテーションと呼びます。便宜的に訓練＝リハビリと呼んでいますが、訓練だけがリハビリというわけではありません。

慣れない新規開設なのでいろいろなことがありましたが、熱心なスタッフと前向きな患者さんに支えられて4年間、何とかやってこれました。地域のニーズに合致していたのはもちろんですが、この間に病院機能評価機構からほめられたり、他地域から医師の研修希望があったり、最近では海外のリハビリ科専門医に見学に来てもらったり等々、かたちの上ではそれなりの軌道にのって来たようです。

海外からのお客様は中国の教授で、聞けば病床数3000床(!)の巨大病院、しかしリハビリ用の病床はそのうちわずか50床で、療法士も30名とのことでした。世界的にはリハビリ医療は、まだまだ贅沢品なのかもしれません。中国もこれから少子高齢化が進むので、日本の先進的なリハビリ医療を参考にしたいなどと言われて、浜田では始めたばかりなのに面映ゆいことでした。励ましと受け取りましょう。

絶対安静による体力低下(廃用)を防ぐ急性期リハビリ、急性期で残った障害や後遺症を患者さんが受容し、乗り越え、再び歩き出せるようにお手伝いする回復期リハビリ、機能維持をはかり生活の質に貢献する生活期リハビリ、どれも重要なのですが、患者さんの変化という意味では回復期リハビリは特に手応えがあります。流行のロボットリハなどにも興味はひかれますが、かならずしも高額な医療機器や高価な薬剤がなくとも、ちょっとした工夫のなかに「先進性」がひそんでいるのがこの分野の良いところだと思います。これからも医療者の都合ではなく患者さんのニーズに沿った、良質なリハビリテーション医療をめざしていきたい思います。医療者として、やはり退院時に患者さんからいただく笑顔や涙、感謝のお言葉に優る喜びはありませんから。

皆様、こんにちは！薬剤部 副薬剤部長の倉本と申します。

私は、今年で4回目の年男を迎えることとなりました。広島出身で転勤族の私ですが、なんと年男を2回、浜田で迎えることとなります。

12年前は、黒川町に旧病院があった時代に勤めていました。当時は、主任でありながらマイペースの「猪突猛進」タイプで、当時を振り返ってみると上司や他部署の方々に多大なご迷惑をかけたと思います。

こんな私に、当時の薬剤部長から、がん薬物療法認定薬剤師の研修に参加して資格をとってみたいかとの話をいただきました。当時私は消化器科病棟を中心に活動し、がん患者さんとの接点も多かったものの、特に専門的な知識も持ち合わせてなく、大きな不安を感じました。しかしこれをスキルアップのチャンスと捉え、研修に参加し無事資格を取得することが出来ました。まさしく12年前の「亥年」は、私の病院薬剤師人生の転機の日でした。

その後浜田を離れ4年前に再び帰ってきましたが、現在は立場上管理職になり、患者さんに関わる機会が以前より少なくなりました。時折、服薬指導を通して患者さんと直接お話をさせていただくことが、とても貴重な時間となっています。2回の「亥年」をお世話になったこと浜田で、培ったことを患者さんのために役立てていきたいと思っています。

12年前の「猪突猛進」ではなく、今後は周りを見渡し、人との関わりを大切に進んでいきたいです。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。



副薬剤部長
倉本 成一郎



臨床検査技師
福島 朱里

臨床検査科の福島朱里です。来年度からは技師歴3年目となります。1年目は上司や先輩が目を光らせ、ご指導を頂く日々。2年目は厳しい視線を頂きながらも出来る仕事が増え、血液検査部門担当として複雑な検査機器を任せられるようになり、身を引き締めて業務をしています。昨年は初めて学会発表を経験しました。内容は、顕微鏡での血液観察で、特徴のある血球がみられたことで早期治療へ繋がった疾患をまとめたものです。きっかけは医師からの質問でした。報告した検査結果をみた医師から、顕微鏡でみえたものを詳しく問うものでした。私の報告したデータは、医師が求める情報量に対して十分ではなかったのです。医師が求めるものを自ら連絡出来なかったことを悔しく感じたのを強く覚えています。この経験は仕事に対する意識を変えました。検査機器に検体をセットして結果を出すだけの作業は、法的に資格がなくても出来ます。検査技師として業務をする私は、ただ結果を出すのではなく、医師が求める内容を考え、柔軟に、重要な結果や必要な検査の追加を自ら報告していけるようになりたいと思いました。この経験から、今年の私の目標は「臨機応変」です。4月からは新人教育の業務が始まります。お互いをフォローし、効率良く業務を行うため、広い視野を持つことを心がけたいです。忙しい中でも知識や技術を研鑽し、迅速で有用な結果報告が出来るよう、仕事に取り組んでいきたいです。

作業療法士 柿本 智成

私は昨年の四月に浜田医療センターに就職しリハビリテーション科の作業療法士として仕事を始めました。それから約一年があっという間に経ちました。今年度は社会人として仕事を行う事、医療人として初めて患者さんに関わるなど様々な事を実際に経験させていただきました。しかし初めて経験する事の中にはうまく出来る事や楽しく行える事だけではなく、自分の力のみでは困難な事や介入の方法でうまくいかず躓いてしまう事も多々ありました。その際にリハビリテーション科の同期や先輩方、先生方や看護師さんなどの多くの方々に助けていただき、様々な問題を乗り越えて解決していく事ができました。

来年度からは後輩や新しいメンバーも加わり環境が変わっていくので、今年度で身に付けた自らの知識や技術などを後輩たちにも伝えていきたいと思います。また伝えるだけではなく新しい視点や考え、方法を柔軟にリハビリに取り入れていきたいと思います。そして日々のリハビリの中で直面した困難な事や難渋した事を他人に頼りきりにするのではなく、自らも勉強していき自力でも解決出来るように精進をしていきたいと思います。そして患者さんにより質の高いリハビリテーションを提供していく為に、リハビリテーション科が一丸となり提供していくリハビリテーションの質の向上を図っていききたいと思います。



財務管理係
小林 青海

昨年は大学を卒業し、初めて社会に出た転機的一年でした。何もかもが初めての経験で楽しく、また、大変であわただしい一年となりました。環境や人付き合いが変わったのはもちろんのこと、それに伴って考え方も大きく変わりました。当たり前のことですが、様々な人がいて仕事が回っていることや、仕事上での私自身のあり方についてです。新人なので仕事の能力はおそらく一番低く、様々なことを助けてもらっていると理解しています。特に同じ部署の人々については、私ができている仕事はほんの一部に過ぎず、きっと私が知りもしない多くの仕事を代わりに担ってもらっているのだという気持ちでした。母からよく言われていた「頼まれごととは試されごと」「遅いことは罪」この二つの言葉の意味を噛み締めます。新人なのでしょうがないかとも思いますが、私の仕事が遅いために他の人が大変になる、これは、「罪」は言い過ぎとしてもよくないことだと考えます。そしておよそ一年がたち、任せられる仕事が増えてきました。しかし、未だ「人ひとりがすべき仕事」がどれほどなのか測りかねます。そこで私の今年の抱負は、できるだけ多くのことを速くこなせるようにする、ということです。去年の年明けも同じようなことを考えていたのですが、結局のところ、前述のような気持ちで取り組み続けることが、自身の向上に繋がると考えます。



教育担当師長
吉岡 典子

5回目の年女を迎えました。あと何回年女を迎えることができるのだろうと考えると、元気で2回は迎えたいものだと思っています。

「イノシシ」とは非常に身近に感じる言葉です。イノシシは春先、タケノコがまだ地上に芽を出さない時期に地面を掘ってタケノコを食す。ジャガイモができる頃になると畑に入りじゃがいもを頂く。田んぼで稲穂が実る頃になると田んぼに入り、田んぼをかき回す。秋、さつまいもができる頃になるとまたさつまいもを頂く。土の中にある炭水化物が好らしい。「おいしいものをよー知っとる!」「1年中困ったもんだ!」と言われながら、地域住民と共存している生き物だと感じています。

春先、夜間に車を走らせるとイノシシの親子づれの道路横断に出くわす。イノシシの子供は「うり坊」と言って、うりのような縞模様が背中にあり、とても愛らしい。道路横断を見て、「なんて、ほほえましい光景!」と思いながら、複雑な思いで暮らしているのも事実です。時には地域の方から、おすそ分けで、血抜きをしたイノシシの塊肉を頂き、「これは若いイノシシで、柔らかくておいしいよ」と言われ、ぼたん鍋にして頂いています。

わが地域には、「うりん坊の里」の名前でおまんじゅうを売っているお店もあります。こうして、自分の干支であるイノシシを身近に感じながら、また12月生まれであることから、「イノシシそのものだね」とよく言われます。

イノシシの行動は「猪突猛進」。向う見ずに猛烈な勢いで突き進むことに例えられることがあります。看護師になって38年、確かにわき目も振らず突っ走ってきたような気がします。結婚、出産、子育ては人並みにしてきたつもりではありますが、いつも仕事第一の思考回路でした。

今年1年「日々の生活を大切にする」を目標に充実した毎日を送っていきたいと考えています。

私は3階北病棟で看護師として勤務しています。3階北病棟は循環器内科、心臓血管外科などの急性期病棟で毎日とても忙しく、昨年もあるという間に1年が過ぎてしまいました。3階北病棟に勤務して7年になりますが、毎年「新人支援看護師」という役割をいただいています。多くの不安を抱えた新人看護師の精神的支えになるのは「プリセプター」といわれる3～4年目の若い看護師ですが、私のようにやや年の離れた「新人支援看護師」は、主に知識や技術の指導を通して新人看護師の成長を支えています。昨年4月に就職してきた新人看護師も1年が経とうとしていますが、この1年間で大きく成長した姿にひと安心しているところです。そして今年もまた4月には新人看護師が就職してきます。しかも、その人たちは自分の長男と同じ年齢だと気づきました。学生から社会人となった新人看護師が、患者さんの命を預かる責任を自覚し少しずつでも確実に成長できるよう、今年は母親のような気持ちで見守りながら新人指導に取り組みたいと思います。私生活では、長男の大学卒業、次男の成人、三男の大学受験が控えています。看護師の母をもち小さな頃から色々なことを我慢し協力してくれた息子たちに感謝して精一杯支えてあげたいと思います。今年は亥年ですが、猪突猛進ではなくゆったりとした気持ちで過ごせる年にしたいと思っています。



3階北病棟 看護師
末友 佐恵子



4階北病棟助産師
横田 佳乃子

当院に就職し、早いもので約1年が経ちました。昨年を振り返ってみると、就職したての頃は、病棟の雰囲気慣れたり、業務を覚えたりするのに精一杯でした。半年が経ち、徐々に業務も覚え、スムーズに行えるようになってきました。また、夜勤が始まり夜間多くの患者さんを1人で見ることにより、優先順位を考えながら業務をすることが求められてきました。さらに、助産師は日中問わずお産の介助があります。1人1人分娩の進行状況が異なってくるため、いつ生まれるかの予測を考えながら、他の患者さんの安全も守っていくことに難しさを感じています。そのため、患者さん全員の安全を守っていくことが引き続き自己の課題です。

私の目標とする助産師像は、「信頼される人となり、患者さんの立場に立って考えケアできる助産師」です。まず患者さんとのコミュニケーションを通して、その人が何を考え、どうしたいのか汲み取ることが大切だと感じています。そのためには、「この人なら大丈夫。」と思っていただけるよう、短い時間の中でも、関係性が築けるようになりたいです。

その中で、患者さんにとって自分は何ができるのかを考え、一方的な援助にならないようにケアしていくことが今年の大きな目標です。また、自分が行った看護ケアについて、先輩に評価していただきながら、より良い看護ケアが提供できるよう日々振り返り、励んでいきたいと思っています。